

7-6

主題 食べたい、食べさせたい、あの笑顔が見たい

経口維持

副題 ～PAP（舌接触補助床）使用による経口摂取維持の試み～

PAP（舌接触補助床）

研究期間 12ヶ月

事業所 特別養護老人ホーム アトリエ村

発表者：吉本孝之（よしもとたかゆき）

アドバイザー：戸原 玄（とらはるか）

共同研究者：大関智弘

電 話 03-5965-3400

メール atorie@toshimaj.or.jp

FAX 03-5965-3403

URL http://www.toshimaj.or.jp

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

豊島区社会福祉事業団・特別養護老人ホームアトリエ村は平成6年6月に入所80名・ショートステイ8名で開設し、現在はデイサービスセンター・地域包括支援センター・居宅介護支援事業所を併設した高齢者施設です。

西武池袋線東長崎駅から徒歩5分、商店街と住宅街に囲まれています。

「真心と思いやりの花咲くアトリエに」がキャッチフレーズです。

《研究前の状況と課題》

〔対象者〕 男性 71歳 要介護5

〔主な既往歴〕 多発性脳梗塞

※入所前の病院での嚥下造影検査により、すでに嚥下障害が認められていた。

■H21.3月 当施設入所

粥ゼリー・ムース食・茶ゼリー 全介助

痰絡み、むせあり 時折吸引を施行

■H21.5月 出血性びらん性胃炎で入院

入院中に誤嚥性肺炎を発症し、嚥下造影検査を施行。嚥下障害を指摘されたが、ご本人も奥様も経口摂取を強く希望された。

■H21.6月18日 退院

入院前と同じ食事形態で開始。痰絡み、むせあり。職員側もご本人と奥様の強い思いに応えたいと細心の注意を払いながら食事介助を行っていた。しかし全身状態の低下も見られ、現場のケアワーカーをはじめとする多職種から経口摂取を続けることへの不安の声が増していった。

《研究の目標と期待する成果》

〔目標〕「口から食べたい」という思いに寄り添い、安全に経口摂取を続けることができる。

〔目指す成果〕訪問歯科診療の導入により

■ご本人の摂食・嚥下状態について具体的に

- ・ どのような障害があるのか
- ・ どの程度リスクが高いのか
- ・ 経口摂取の維持が可能か

を知ることができる。

■誤嚥のリスクを最小限に抑えるために最適な

- ・ 食事及び水分の形態
- ・ 食事量
- ・ 介助方法（姿勢）

を知ることができる。

■医学的根拠に基づき職員のケアが統一できる。

■口腔ケアや摂食・嚥下リハビリ等により咀嚼・嚥下状態が改善できる。

上記の成果を目指して、研究に取り組んだ。

《具体的な取り組みの内容》

■H21年6月29日 1回目の診療

- ・安静時の唾液誤嚥あり
- ・食物摂取時に不顕性誤嚥及び咽頭残留あり
- ・声門の萎縮あり
- ・非常にリスクが高い（胃ろうとの併行も検討）

⇒上記の診断を受けて

- ・水分はトロミ状で提供、交互嚥下を徹底する
- ・リクライニングは60度を保つ
- ・声門閉鎖訓練（食事時の発声を促す、足に力を入れる等）を行なう

■H21年8月3日 2回目の診療

⇒対応を継続

■H21年9月22日～10月9日

誤嚥性肺炎で入院

■H21年11月16日 3回目の診療

- ・ゼリーやペースト状食物の誤嚥あり
- ・舌の動きが悪く食物をスムーズに送り込めない

⇒PAP（舌接触補助床）の作製を提案される

■H21年12月14日 4回目の診療

PAPを作製し、装着を開始する。

⇒その後3回、PAPの調整を行なう。

■H22年3月5日～10日 肺炎のため入院

■H22年4月5日～5月27日

誤嚥性肺炎のため入院し、胃ろうを造設する。

■H22年6月21日 8回目の診療

誤嚥のリスクは依然高いが、経口摂取訓練（直接訓練）は可能との所見あり

■H22年7月7日 茶ゼリーによる訓練開始

《取り組みの結果と評価》

■嚥下内視鏡検査により、経管栄養との併行が望ましいほど誤嚥のリスクが高いことが判明した。

■リスクを最小限にするために最適な食事や水分の形態及び介助方法について、医学的根拠に基づく指導を受けることができた。その結果職員のケアが統一され、不安感解消にもつながった。

■食塊形成の不良により送り込みに時間が掛かっていたが、PAPの使用で舌の有効な動きを取り戻すことができ、食塊形成が良好になり送り込みがスムーズになった。その結果、嚥下反射のタイミングが改善され誤嚥のリスクが軽減された。

※PAP（舌接触補助床）…舌が接触できない口腔内の空間を埋め、適切な舌一口蓋接触圧が形成できるように上顎に装着して厚みを持たせるための口蓋床のこと。H22年度より保険適用。

■入所時から経管栄養への移行が懸念される方であったが、約1年間、ご本人と奥様の強い希望である「口から食事を食べること」が継続できた。

■その後残念ながら胃ろう造設となったが、現在経口摂取再開に向けて訓練に取り組んでいる。

《まとめ》

「食べたい」ご本人、「食べさせたい」奥様の強い思いが原動力となり、「あの笑顔が見たい」職員の取り組みにつながった。また介護と医療の連携の必要性及び重要性を実証することができた。

（倫理的配慮に関しては、研究発表の目的とプライバシー遵守について、ご本人及びご家族に口頭で説明し、ご了解頂いています。）

《提案と発信》

VE（嚥下内視鏡）検査やPAP（舌接触補助床）等の医療技術は心強い味方ですが、すべての食事・嚥下に関する課題を解決できる訳ではなく、ご利用者のニーズに応えるための“ツール”であると心得なければなりません。介護・医療それぞれの専門性と、ご利用者（ご家族）の思い・職員の熱意、すべての相乗効果によって、現場で“生きる”ケアが“産まれて”きます。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。